



中国人学生と共に
(右から2番目)



雲南省麗江玉
龍雪山にて

中国・武漢大学 留学体験記

総合科学部 社会創生学科 3年
玉木 絢子 (たまき あやこ)

中国での生活

私は2016年9月から2017年7月まで、中国の武漢大学に留学しました。武漢は湖北省東部に位置する省都であり、中部における経済や貿易等の中心都市です。中国大陸を東西に流れる中国最大の河川・長江は武漢のシンボルであり、長江を中心に賑やかな町が広がっています。私の通った武漢大学は、中国の国家重点大学の一つにも数えられる歴史ある大学です。

中国に来てからは、生活のあらゆる面で驚きの連続でした。最も驚いたことは、中国国内のネットの発達ぶりです。電子決済サービスの普及により、都市部では基本的にどんな場所でもスマホ一つで支払いを済ませることが出来ます。私の生活していた武漢は中国でも二番目に電子決済の利用率が高く、将来的には「キャッシュレスシティ(無現金都市)」の実現を目指しているのだそうです。

一方で、農村地帯に行けば、都市部との生活格差に驚かされました。私は中国の旧正月・春節を、雲南省の農村地帯にある中国人のお宅で4日間過ごさせてもらいました。農村地帯では水道設備が十



春節を過ごした農村の家



武漢大学の歴史ある建物



武漢大学に桜を見に訪れる人びと

分整っていない家も多いらしく、私のお世話になった家では風呂場がなく、トイレも石を削って作られた簡単なものでした。そこにはもちろん都市部のような便利な設備はありませんでしたが、私は農村ならではの伝統的な春節を満喫し、人のぬくもりをしっかりと感じる事ができました。

中国人との関わりにおいては、私のことを日本人だと知ると熱烈

な歓迎をしてくれる人もいる一方で、やはり日本のことをよく思わない人もいます。私はタクシーに乗ると、よく日本嫌いのおじさんに出会いました。そういう人に対して、私は特に日本を好きになっただけでおもうとは思いませんが、日本人だからという理由で私個人に對しても嫌悪感を持たれるのはやはり悲しいです。だから私は敢えて積極的に話しかけて、タクシーに乗っている30分ほどの間はそれおじさんと親しくなろうとしました。こういう点について言えば私はかなりポジティブになったし、肝も据わったと思います。また中国語でうまく意思疎通をはかれるようになったことで、中国人との距離も縮まったと感じました。

留学生との交流

1年前、私は中国語をまともに話せぬまま中国へ向かいました。当初は生活することで精いっぱいだった私を助けてくれたのが、多くの友人でした。国籍や文化、母語、宗教を異にする者同士が仲良くなれるということ、これは今まで日本でしか生活したことのない私にとっては何よりも新鮮な経験でした。世界各地に友達がいることを思うと、自分の中の世界が

グッと広がった気がして本当に嬉しかったです。そしてさまざまな国の人の暮らしや文化、ものの考え方の一端を知ることができたことで、留学前と比べて世界の国々をより身近に感じられるようになりました。

一方で、自身の日本人としてのアイデンティティも芽生えました。留学中、多くの留学生や中国人と関わる中で、私は自分の考えや行動が日本の文化の影響を強く受けていたことに気付き、文化はひとりの人間を構成する一つの大きな要素であるということを感じました。私は自分の日本人ならではの部分を知ったことで、これからはより客観的に自分自身を見つめることができるだろうと思えます。

私にとって初めての海外であり、初めて直接目にするアジアの大国・中国は、私に多くの発見をもたらしてくれました。中国で過ごした約一年間は決して上手くいくことばかりではありませんでしたが、私を人間的に成長させてくれた中国には本当に感謝しています。そして何よりたくさんの人に会えたことで、私の留学生活は本当に愉快でかけがえのないものとなりました。私は中国に留学して良かったと心から思います。

My Life in Tokushima 徳島大学での6年間

医学部 医学科 6年
安琪尔 (アンチル) [中国]



留学生
滞在記

私は中国の内モンゴル自治区の出身で、小さな地方都市と村で暮らしていました。小学三年生になった頃、急遽両親に連れられて日本にきました。それからずっと日本で教育を受けてきました。医学部への進学を志望していた私は、大学に進学しても医師になる夢を諦めることができず、一年間大学に通いながら受験勉強をして、翌年2012年4月に徳島大学医学部に入学しました。



佐賀県唐津市で訪問診療後に

前年度に他大学で履修した単位が認定されたので、1年生のときは比較的自由な時間が多く、専門科目以外にも興味がある一般教養科目を履修しました。特に印象に残っている講義は「移民から世界をみる」という授業で、小学生のときに来日した私にとって非常に興味深い講義でした。この授業は移民受け入れに慎重な日本社会の中で、実際に移民として働く当事者のインタビューのビデオをメインの教材にした授業でした。小さな頃から日本で暮らし、ほぼ日本人と変わらない生活をしてきた私にとって、今一度「外国人」や「移民」として日本社会で暮らすとはどういったことなのかということ

を認識させられました。

2年生からは専門を学ぶために医学部キャンパスに移り、朝から夕方までぎっしり詰まったカリキュラムをこなしていききました。医学部の学生としての生活は常に勉強中心です。必要な知識の量は本当に膨大で、試験前は友達とともに深夜まで、時には朝まで図書館や近くの飲食店にこもりました。徳島大学は医学研究にも力を入れており、私は1年間眼科教室に配属されて、先生方の元で手術前後の視機能改善に関する臨床研究に携わり、韓国短期留学にも行かせていただきました。徳島大学は北海道から沖縄まで幅広く関連病院を持ち、学ぶ環境や機会が非常に充実している大学だと感じています。

将来は形成外科医を目指しています。私の出身地域では、未だ医学の目的は病気を「治す」ことですが、私が第一線で働く頃には、病気を治した先の「生活の質(QOL)の向上」が必ず求められる時代が来ると思っています。そのときには、新生児奇形の手術や火傷治療、顔面再建、皮弁形成、美容医療と形成外科医が担うものは多岐にわたり、患者さんに希望を与えることができるものであると思っています。まずは日本でしっかりと一人前の医師になり、その後、指導医になって、故郷から自分の後輩となる留学生を迎え、彼らに日本の良さを伝えていく、そんな内モンゴルと日本の橋渡しという存在であり続けたいと思っております。



災害医療学習中の一幕(筆者は中央)



徳島県海部町、地域実習後に同級生と共に星空鑑賞